［解説］

「東北紀行」とは何か

板坂　耀子

一　紀行文学史の中で重要な存在

たとえば東海道では文学的伝統と現実の卑俗化の板挟みにあって、紀行の名作は生まれにくい。中国地方は九州方面への大方の旅人が瀬戸内海の船旅を選ぶために通過されずに、紀行の数は非常に少ない。江戸の周辺は長途の旅というより近郊紀行の名作が目立つ。名所がひしめく京都では題材が多すぎて紀行作家は苦労している。四国、九州、木曾路、それに江戸時代の紀行文学史の中で最も重要な蝦夷紀行などはそれなりに名作が多いが、旅する行程が限られていて、安定した作風だが変化に乏しい。

そのように考えると、東北紀行は、その範囲の広さとともに作品の多さと多彩な性格で、おそらく紀行を地域別に見た時には群を抜いた存在だろう。

かつて、膨大な江戸紀行の研究に取り組むにあたって私はいくつかの特徴を持つ作品のグループに分類することから始めた。それを東北紀行に応用するとき、当面意識するのは次の三点である。

1　蝦夷の前庭、日光の奥庭

蝦夷紀行は大半が東北を経由する。蝦夷地の松前の殷賑に比して東北の貧しさに強い印象を受けている作者も多い。蝦夷紀行にとって東北紀行の部分はどういう価値や意識のもとに書かれているかは今後の検討課題だろう。一方で東北紀行と銘打ちながら実際には蝦夷まで行っている紀行も少数ながら存在し、それは蝦夷紀行の書名を冠したものと異なる性格を持つのかも考える必要がある。

同様に位置や地域を考慮するなら、これも一定の量と質を確保する日光紀行類との関連や作者の意識も問題となる。蝦夷地への前庭として描かれる東北は、また日光の奥庭として描かれている地域でもある。

2　松島という中心

次に目につく作品群は松島を題材とした紀行の一群である。もとよりその他の東北紀行でも松島は欠かすことなくとりあげられるが、通過する場所ではなく、そこを目的とした紀行としては質量と

もに東北紀行の中で最も大きな存在である。以前に私は、松島は関東以南のみならず、東北地方の人たちが訪れる中心として多数の作品を残しているという点でも重要で、別途の検討を要すると述べたが[1]、今もその印象は変わらない。

3　有沢一族の紀行類

江戸紀行の本流は林羅山から貝原益軒を経て、本居宣長をはじめとした国学者の紀行や蝦夷紀行に引き継がれ、幕末の小津久足にいたって完成するというのが私の大まかな江戸紀行文学史の把握だが、これでは説明のつかないのが、益軒以前の江戸時代初期に北陸の有沢一族が参勤交代の途次に記している膨大な紀行類である。一見備忘録風の道中記のようだが、内容や表現は益軒が基礎を築いた江戸紀行の特徴を、より早い時期にもかかわらず充分に具えている。その実態については勝又基氏が報告されているが[2]、そのような意識や作風を生み出すに至った背景は今後も重要な研究対象であろう。

二　歴史と風土が生み出すもの

更に全体を通しての東北紀行の印象として、次のようなことを感じる。

1　古代への憧憬

「おくのほそ道」の旅にあたって芭蕉が求めたのは日常から脱した苛酷な旅の環境とともに、辺境や異境だからこそ残る古代への憧憬だった。それもまた江戸紀行全般に通ずる特徴であり、僻地への同情や軽蔑は時にあっても、より目につくのは都会では滅びた過去が現存することへの讃嘆である。文化果てる地は、そのまま文化が生き残る地でもあった。歌枕と古戦場はその象徴であり、芭蕉が平泉と壺の石文で感涙にむせぶように、江戸時代では歌枕より古戦場がむしろ大きな存在となる。

「歌枕になくても美景」と、風景を賞賛する記述は江戸紀行にしばしばあるが、それはあくまでも異例で新鮮な観点であって、関東では鎌倉、九州では太宰府や対馬の人気が示すように、江戸時代の人々は現代の私たちよりはるかに歴史的なものへの関心が強い。たとえ卑俗なまやかしであっても、何らかの伝説に彩られない地名や建物は、どんなに美しくても魅力を感じなかったのではないかと思えるほどである。

2　破格な形式

紀行評論家でもあった小津久足は、知的考証を紀行の重要な要素と考える。一方で国学者の片岡寛光のように、こうした考証を紀行から排除することを強く主張する紀行作家もいる。

その寛光が序文で、本来あるべき紀行の姿として絶賛する服部菅雄「壺石文[3]」は、滞在記と旅行記が混在し、各地で見聞した奇怪

な逸話を長文で書きこむなど、むしろ異色で破格な紀行だ。

東北紀行には、地域が広範にわたり作品数が大量であることを考慮しても、奇談集の体裁を取るもの、伝説の紹介を主とするもの、紀行としては変わり種の芭蕉の「おくのほそ道」や只野真葛「いそづたひ」などのように、このような自由さ、破格さを持つ作品が多い。それは通常の安定した形式では表現できない、蓄積されて何重にも重なった豊かな文化の風土が生むものかもしれない。

三　「陸奥日記」の意義

小津久足「陸奥日記」を、このような東北紀行の中において見るとき、その意義や価値は更に明らかになる。

それは、蝦夷紀行や日光紀行の一部ではなく、「東北」を中心の題材とし、異色な変化球ではなく、けれんみのない堂々とした本格的な紀行として完成させた、ありそうでなかった貴重な東北紀行と言えよう。奇をてらわず肩肘はらず、それでいてゆうゆうと「駕籠がない街道はきつい」などという他の紀行にはない日常の情報をさらりと書きこむ。いつものことだが、生活者として芸術を楽しむことへの、あきれるほどの自己肯定と自信も、資本主義の近代がすぐそこに迫っている時代の反映なのだろうか。そういう意味ではこれは江戸時代そのものが生んだ東北紀行の総決算でもある。

注

（1）拙著『江戸を歩く』（葦書房　一九九三年）中の「なぜ、松島が」の章。

（2）勝又基「藩士文芸としての紀行文」ぺりかん社『江戸文学』28号　特集「近世紀行文」。

（3）皇學館大学紀要32号に大杉光生氏の翻刻がある。これは静岡県富士文庫の写本が底本で、東北大学にも内容はほぼ同一の写本がある。